

● 狸 13 娘に化けた狸 ●=====>猪・鹿・狸より

鳳来寺山門谷の、高德（こうとく）の山に、杣が小屋を差していた時のことだと言う。その小屋には三人泊まっていたそうであるが、ある晩一人が山を出て、門屋の馴染みの女のもとへ寄って遊んで来た。するとその翌晩三人が爐に向かっていると、だしぬけに小屋の垂蕙を上げて顔を出したものがあつた。見ると若い女で、しかも一人が前夜寄って来た馴染みの女だった。へへへと笑っていたそうである。どうも怪しい、これはてっきり狸の悪戯に違いないと覚って、それでも面白半分にからかってみた。お前はどこだいと言うと、俺（わし）や門谷の田町だと答えたそうである。田町の誰だいと言うと、へへへと笑って口を押さえている。丁度その時みんなして鳩を焼いて喰っていたので、喰わんかいと言うて一串差し出すと、黙って受け取って喰ってしまった。それなり娘は帰って行った。翌晩も同じようにやって来たそうである。三日目の晩に、小屋の入口に鳩の肉を餌にして虎挟みを仕掛けておくと、翌朝一匹の古狸が掛かって死んでいた。それきり娘はもう来なんだ。後でその狸を煮て喰ったが、やはりこわくてうまくなかったと言う。

娘に化けたわけではなかったが、鳳来寺村長良の村端れに出た狸も、狩人の仕掛けた虎挟みに掛かって、以来出なくなった。それまで崖の上から砂を振りかけたり石地蔵に化けたりして、通るものを悩ましたと言うた。

狸が石地蔵に化けた話はまだあつた。化けたというよりも、使つたと言う方が適當だつた。出沢の村から谷下（やげ）へ越す山の途中に、村雀と言う神様があつた。その傍らに鉢冠り地蔵と言うがある。その地蔵がときおり化けて通る人を嚇した。やはり狸の仕業ともっぱら言うた。ある月夜に村の関原某が通りかかると、地蔵がげらげら笑い出したそうである。かねて覚悟をしていたので、腰の刀を抜くな否や斬りつけて、そのまま帰ってしまった。翌朝行つて見ると、地蔵が胴を真二つに斬られていた。そのまま今に胴中から二つになって立っている。それ以来もう化けなくなったそうである。

別の話では、鉢冠り地蔵は狸の仕業ではなくて、地蔵自身が化けるのだとも言うた。いずれにしても、たしかに俺が化けたと名乗るわけではないから、にわかにはどっちとも決められない。

# 村雀様(出沢-西沢)



出沢岩跡から、クボ⇒コデロを通過して浅谷の谷下に行く途中、坂を登りきった辺りに古木があり、その根元に村雀様があります。鉢冠りの地蔵様は見当たりませんでした。村雀様のお祠も、刃物で斬られたように割れていました。

古老に訊いたところ、斬られて二つになったお地蔵様は、昔は確かにあったが今はどこにいったか判らないとのことでした。